



2020年度トレーナー検定試験 試験結果講評

2020年10月7日

特定非営利活動法人 小学校英語指導者認定協議会

トレーナー認定委員発行

実技試験

今年度のトレーナー検定試験は Zoom によるオンラインでの検定となりましたが、実技試験の概要は例年通りでした。Zoom に慣れていない受験者は緊張の中での受験だったかもしれませんが、オンラインでの授業や教員研修は今後も実施されることが予想されますので、J-SHINE トレーナーとして対面だけでなくオンラインでも指導やトレーニングができるように、デバイスや回線の環境を整えておくことが望ましいです。

模擬授業では、適切な Teacher Talk を使うことを心がけてください。大変わかりやすい英語で授業を進める受験者が多かった中、残念ながら、導入の発話や児童への問いかけの英語が正確ではない受験者も見受けられました。トレーナーは、第二言語としての英語でコミュニケーションをとるロールモデルとしての役割も大きいので、日頃から自身の授業を録画して授業後に確認するなど、より正確でわかりやすい英語での指示や発問ができるようにしてください。

オンラインでの実技試験では従来のようにホワイトボードの使用ができないため、今回は B4 程度のスケッチブックとマーカーの使用を可としました。実施要領には「板書等は模擬授業の時間として与えられた 5 分の中で行うこと」と明記されていましたが、授業の準備時間内にスケッチブックに絵を描いていた受験者がいたため、タイムマネジメントの点数が大きく減点となりました。また、模擬授業の際に指導者の問いかけに反応していた受験者がいましたが、児童への発問に反応することはトレーナーとしてコメント・アドバイスをする立場としてふさわしくないと考えます。

コメント・アドバイスでは、持ち時間の 3 分を有効に使って、授業でよかったことや改善すべき点を的確に指摘できる受験者が多かったです。実施要領では「授業者はアドバイスを受けるのみ」となっていますので、指導を受ける場合は静かに聞くようにしてください。オンラインの場合、小さな声でのつぶやき等もマイクが拾ってしまう場合がありますので、コメント・アドバイスを受ける時には不要な発話をしないよう気を付けてください。

実技試験では、模擬授業とコメント・アドバイスが同配点になっています。つまり、授業の改善・向上のために授業者にフィードバックする力は、授業力と同等に評価されます。授業のよかった点を評価して、指導者を勇気づけると共に、授業改善のために論理的で説得力のあるフィードバックを冷静にそして愛情をもってできるようなコミュニケーション能力や人間性が求められます。指導やトレーニングの中で、日頃から「人を育てる」という視点で児童や指導者と関わり合いをもつことを意識してください。

口述試験

領域 1

第1領域は、準備が非常に難しく厳しいセクションですが、今回はよく準備されていて、しっかりとした解答がいただけたと評価をしています。用語の定義は簡単そうで難しいものですが、基本的なことは間違いなく答えられていたと思います。ただし、トレーナー検定であることを考えると、単に理論を説明するだけでなく、小学校英語が置かれた現状を踏まえて理論をどのように教室での指導に適用していくかが重要です。この点においてはまだ課題が残ると感じています。それでも、第2問の児童の英語の間違いについての対処で、すべての受験者が、教員が正しい形に修正したフィードバックを与えるなど、児童に気づく機会を与える「間接的な間違い修正」を行うと解答されました。現在の小学校英語が目指す方向と一致した指導法であって理にかなった解答だと思いました。またその背後に十分な現場での教育経験があることをうかがわせるものでした。

今回の試験では、トレーナーとして第二言語習得の理論をどのように日本の小学校英語という現場に落とし込めるか、その力を測ることを目標としました。第二言語「習得」を目指しているものの、小学校英語という場は、「学習」しか起こらない環境です。そのため、どのようにすれば学習したことを最終的な習得に転化していけるかというのが、日本の学校現場に共通する課題となっています。

そこでまず第1問で習得と学習の違いをきちんと理解しているか、次にそれがどのように結びつくのかという関連について正しく把握しているかを問いました。用語の定義はよく勉強されているなど感じました。細かいことを言えば learning/acquisition の区別では、「learning が acquisition に転化することはない」という提唱者の考えが支配的でしたが、それに対して後の研究者たちが「explicit から implicit へ」を理論化していったという背景がありました。その過程で第二言語習得の理論構築に関わる重要な概念 (restructuring, noticing に結びつく概念など) が生まれてきました。ただし、ここまで答えないといけないとなると、トレーナー検定の範囲を越えた要求となります。このレベルの解答ができていないからといって減点をすることはしていません。

第2問は、習得段階にある児童の英語をどうとらえ、どう指導するのかを問いました。これには2つの要素が関連しています。ひとつは、習得段階をどうとらえるのか、です。第一言語であれ第二言語であれ、発達段階で文法的な間違いは避けられないものです。その中で一貫性のある間違いがどのように形成され、どのように修正されていくのかを理解しないと過剰な矯正によって児童を戸惑わせることになったり、いくら矯正しても一向に直らないことに指導者も児童もイライラするかもしれません。間違いだからと言ってすべてを正す必要はなく、「まだこの文法項目が習得できるステージにはない」という判断で直さない、むしろ言語活動の中で意味のやり取りに問題がなければそれを「間違い」とみなさない、という考え方もあります。今回の受験者の中で、そこに言及されている方は残念ながらもありませんでした。みなさんダイレクトに「いかに直すか」か

ら話されていました。もうひとつの要素は、授業内の言語活動の目的と照らし合わせて、その文法項目が習得すべきターゲットとなっているかどうか、という指導上の判断です。そこで、数字と果物の名前が言えるようになることが目標だったり、「お買いもののやり取りをする」というタスクの達成が目標なら、複数を表す形態素 *-s* ができることはターゲットではありません。修正する必要は必ずしもありません。逆にそれがターゲットの一つなら、放置しておくのはおかしなことです。ただし、文法的な発話ができるために集中的なトレーニングをするというのが、現在の小学校英語の目指すものと一致しているかは疑問が残るところですが。

これからさらに第1領域の準備を続けていく時、ひとつひとつの理論がどのように現場での指導に適用できるかを考えながら勉強をしていくことを忘れないでください。トレーナーにはそういう意識が必要です。

領域2

第二領域では、小学校外国語（英語）及び外国語（英語）活動の現状と課題を問いました。小学校での研修などに関わる立場となるトレーナーに求められるのは高いレベルの知識や理解のみならず、それをわかりやすく端的に説明する力です。2020年度は新しい学習指導要領のもと、高学年では外国語（英語）での「読み」と「書き」の指導が始まりました。これまでの児童英語や中学校などでの文字指導と何が違うのか、それはなぜなのか。課題図書や関連する資料をしっかりと読み込み、小学校での指導のゴールが明確に理解されているかが問われました。さらに、指導者の体制や現場の変化の実情に関して、チームティーチングを目指す J-SHINE トレーナーとして、小学校現場の実情に照らしての問題意識を持ち、文部科学省をはじめとした公の発信にアンテナを張って備えているかが試されました。

ほとんどの受験者がしっかりと勉強して、よく試験に備えておられたと思います。ただ、基本的な事項は理解し表出したがそこから論を展開できず、持ち時間を持て余してしまうケースも見られました。J-SHINE トレーナーとして指導的立場で小学校での研修や校内での学び合いの機会に臨むことを想定すると、与えられた時間を過不足なく活用する能力も必要です。知識と技能に加え、自分が理解していることを、具体例やかみ砕いた説明などを加えて「相手に伝える」のもトレーナーの力です。その意識をもって日々の研鑽を重ねてゆかれることを期待します。

領域3

第三領域では、「英語の読み上げ」「英語の読解」「教授法に関する知識」が問われました。まず「英語の読み上げ」は *intelligibility*（伝わりやすさ）が問われました。基本的な読み間違いがないか、英語らしい抑揚があるか、チャンクごとに意味を捉えて読んでいるかどうか、言い淀みがないか、等がポイントとなりました。今回の「読み上

げ」の試験では、アカデミックな用語の読みが課題となりました。普段から学術書を読むだけでなく、Podcastなどで専門分野のレクチャーを聴くことも良いと思います。

つぎに「英語の読解」ですが、与えられた時間内で、全体の意味の把握、パラグラフ構成、具体的な問いの中身を理解する力が問われました。示された「問い」は、部分ではなく、全体から意味を把握することによって、より正確につかめるようになります。また背景知識を使って読み解くことも重要です。英語教授法の基礎知識が有効に働きましょう。また課題テキストを通して読むといいでしょう。

さいごに「教授法に関する知識」ですが、実際に問われている内容と回答とのズレ、つまり妥当性の低さが目立ちました。知識と実践例を結びつけていくことは、簡単なことではありませんが、日頃から指導する内容と理論を結びつけて考えることが大事です。

コロナ禍に伴い、今年度の小学校は長い休校期間を経てのスタートとなりました。自治体や学校によっては遠隔オンラインでの指導が行われ、GIGA スクール構想の推進が進められる中、今後指導者には ITC のスキルが必要です。トレーナーには高いレベルでのオンラインでの指導や発信の技術も期待されるでしょう。今回のトレーナー検定試験はオンラインでの実施となり、受験生にはこれまでとは違う準備やスキルが求められることとなりました。しかし、これを今後への布石と捉え、この経験をこれからの小学校英語での指導に活かしていただきたいと願っています。

以上